タイムカプセル

椙本孝思 Takashi Sugimoto

アルファポリス文庫

http://www.alphapolis.co.jp/

一

トシアキが隣町の駅に到着したのは待ち合わせの時刻から二十分後。構内に掲げられた時計の針は十二時二十二分を指していた。広い駅ではない。改札を出て辺りを見回すが、それらしい女の姿は見当たらない。行き交う人々を邪魔しないように隅に逃げると、観光ポスターが貼られた白い柱に背を預けた。

視線を構内から街中へと向ける。居酒屋やナイトクラブが並ぶ繁華街は、昼間とあってかさほど混雑はしていなかった。バッグから携帯電話を取り出して液晶画面を確認する。日付はゴールデンウィークが明けた翌週の土曜日。不在着信は表示されていない。遅れる旨は先にメールで伝えていたが、返信も届いてはいなかった。

「待ち切れずに先に行ったか」

午前の仕事が長引き待ち合わせの時刻に間に合わなかった。遅刻を怒って放って行かれた訳ではないだろうが、勝手に予定を変更された可能性はある。もう一度辺りを見回すが、やはり誰も目に止まらなかった。トシアキは相手の顔を知らない。もう少し正確にいうと、『今の』相手の顔を知らない。携帯電話をバッグにしまい、代わりに一通の

葉書を取り出す。『相葉俊秋様』と書かれた丁寧な文字。裏面には『東大阪市立　香坂南小学校　六年二組　同窓会のお知らせ』という見出しが印刷されていた。

「十五年も経つからな」

葉書の差出人は、『矢神紗恵』。当時クラス委員長を任されていた女子生徒であり、今の待ち合わせの相手でもあった。自分と同じ町の六丁目に家があったが、彼女が今もそこに住んでいるかどうかは知らない。三つ編みの髪に大きな眼鏡。真面目できつそうな表情を覚えているが、二十七歳になっても同じ姿でいるとは思えなかった。葉書には同窓会を開催する旨とともに、会場となる中華料理店の名前と地図も印刷されている。駅から歩いてもさほど遠くはなさそうだった。

「こら、トシアキ」

離れた所から声をかけられて顔を上げる。正面から春めいたワンピースを着た若い女が、少し首を伸ばしてこちらに近付いて来た。

「遅刻だよ」

「え、ああ、サエか？」

戸惑いながら返答する。軽くブラウンに染めた長い髪が風になびき、薄化粧をした色白の顔に目が輝いていた。見覚えのない大人の女。だが待ち合わせの相手ならサエに違いなかった。

「サエか、じゃないでしょ」

「ああ、うん。ごめん……」

動揺を隠すように苦笑いして謝る。サエも満足げに笑みを浮かべてうなずいた。

「久しぶり、元気そうだね」

「ああ、久しぶり」

「一目で分かったよ。あんまり変わってなくて良かった」

「そうかな。そっちも……」

「さっき見逃したでしょ」

「あれ、そうなのか？」

サエは呆れ顔で溜め息をつく。その顔に小学生の頃の面影はほとんどなく、トシアキの目には彼女が突然成長し、眩しく変貌を遂げたように映っていた。

「悪かったよ。てっきり眼鏡をかけているものだと思っていたから」

「何それ。私の印象って眼鏡だけ？」

「名札も付けていない」

「ばか」

サエは軽く返して笑う。

「行こっか。もう先に同窓会始めちゃってるよ」

「ああ。近くなんだよな」

「福建飯店っていう中華料理屋さん。知ってる？　ケンのお店なんだよ」

「ケンの店？　あいつ、料理人になったのか」
　トシアキは懐かしい名前から過去を思い出す。張城建（はりじょうけん）。ケンも自分たちと同じ、六年二組のクラスメイトだった。丸々とした体と太い声を持った肥満児。あまりいい印象はなく、いい加減な性格で、いつもからかうような笑みを浮かべていた。
「……凄いな、自分の店を持っているんだ」
「そうだね。今日もぜひお店を使ってくれって言われたの。安くしてくれるんだって」
「そりゃ頼もしい。行こう」
　サエの案内に従い駅を出る。身長の差も随分と広がっていた。
「トシアキは今何してるの？　まだ香坂町（こうさかちょう）にいるの？」
「実家の店で働いている。今日もそれで遅刻したんだ」
「店？　ああ、青果店だったね」
　サエは思い出したように手を叩く。トシアキの実家は『香坂商店街』の一角に店を構える、『アイバヤ』という青果店を営んでいた。
「お店継いだの？」
「いや、オヤジとオフクロの手伝いってところかな。どっちも嫌になるほど健在だ」
「あれ、そういえば嫌がってなかったっけ？　八百屋さんのお仕事」
「いつの話だよ。そう言うサエは？」
「え？　ああ、私は……」

　サエはそう言ってやや口籠もる。トシアキはもしやと思って目を向けたが、左手の薬指に指輪はなかった。その手が動き、バッグから名刺ケースを取り出す。中の一枚を抜いてこちらに差し出した。
「……ええと、私は一応、こういう者です」
　名刺には、『旬鮮第一！　株式会社ネバーライフ　大阪支店　サブバイヤー　矢神紗恵』と印刷されていた。
「ネバーライフ？　スーパーマーケットの？」
　トシアキは聞くまでもない質問をする。見慣れたロゴマークは商店街の近くにもあるスーパーマーケットと同じ物だった。サブバイヤーということは、店に陳列する商品を買い付けるバイヤーのアシスタントなのだろう。サエは少し気まずそうな表情でうなずいた。
「香坂商店街の近くにもあるよね。あれ、うちの担当なんだ」
「去年にできた店か。流行っているみたいだな」
「……なんて言うか、ごめんね」
「え？　あ、いや……」
　トシアキは名刺から顔を上げて首を振る。どうやらサエは、自身が勤める店が『アイバヤ』の商売敵となっていることを心配しているようだ。
「サエが謝ることじゃないさ。凄いじゃないか。大きな会社に勤めていて」

「ありがと。でも、やっぱり影響あるんでしょ？」
「ないことはないが、そんなことを言っても仕方ないだろ」
　トシアキはわざと強気な態度で返した。実際には昨年『ネバーライフ』が近所に出店して以来、『アイバヤ』を含めて商店街全体は大きく売り上げを落としている。ただ、それで『ネバーライフ』を恨むのは筋違いであり、当然、一社員に過ぎないサエに何の責任もなかった。
「うちはうちでやっているから、気にするなよ。香坂町の店も担当しているなら、また会う機会があるかもしれないな」
「うん、分かった。私も時々お店に行くから、また『アイバヤ』さんにも立ち寄るね」
　サエは安心したような表情でうなずいた。
「仕事の話はここまでだ。同窓会、みんな来てくれたのか？」
「かなり出席率いいよ。マスザキ先生もいるしね」
「先生も？　それは凄い」
　トシアキは驚いて声を上げる。益崎義憲（ますざきよしのり）。マスザキ先生は六年二組の担任教師だった男だ。痩（や）せて背が高く、グレーのスーツに横分け髪という地味な格好で教壇に立つ姿を覚えていた。
「さすがサエが呼びかけただけあるな。みんなもクラス委員長の号令に従ったんだ」
「違うでしょ」

　サエはトシアキのお世辞を笑って否定する。
「葉書の追伸が効いているんだよ、きっと」
「追伸なんてあったのか？」
　トシアキは再びバッグから葉書を取り出す。同窓会の案内状には日時と場所、費用と差出人名が印刷されている。サエが手元を覗き込んで隅の一文を指さした。
「……なお、当日は十五年前に埋めたタイムカプセルの開封も予定しております、か」
「読んでいなかったんでしょ、もう」
「……タイムカプセルって、校庭に埋めた奴か？」
「そう。作文を書いて入れたでしょ」
「あれか……」
「十五年後に開ける約束だったんだよ。忘れていたんじゃない？」
　サエは上目遣いで尋ねるが、トシアキはただ感慨深げに葉書の七文字を見つめていた。タイムカプセル。銀色に光る丸い容器。すっかり忘れていた光景。頭の中が思い出に満たされてゆくのを感じていた。

二

『福建飯店』は、大通りから一本路地に入った所にある小さな店だった。赤色と黄色を基調とした外観に昔ながらの中華料理店の雰囲気を出しつつも、建物自体はまだ新しく、メニュー看板やディスプレイには清潔感が漂っていた。入り口には『本日は団体様のご予約により、一般のお客様の入店をお断りしております』と貼り紙で告知されており、その隣の黒板には『歓迎　香坂南小学校　六年二組　同窓会一同』と白いチョークで書かれていた。

「いらっしゃい。ああ、サエか。おかえり」

「ただいま。連れて来たよ」

「おお！　トシアキかぁ！」

トシアキは入店するなり大声で呼びかけられる。目の前の厨房には、白衣を着た太った男が大鍋を振りながらこちらに目を向けていた。

「ケンか。久しぶりだな」

「よく来たなぁ。入れ入れ。もうみんな集まっているぞ」

ケンは顎をしゃくって案内する。彼の姿は小学生の頃からほとんど変わりなく、顔も

体も拡大したようにそのまま大きくなっていた。サエの後に続いて店の奥に入ると、賑やかな声が聞こえ始める。中華料理店でありながら団体用に座敷席があり、四つの円テーブルには二十人以上の人間が分かれて座っていた。

「ええと、相葉です。遅れてすみません」

トシアキが恐縮しながら挨拶をすると、周囲から一斉に遅いだの、久しぶりだのと声をかけられる。どうやら宴会は既に始まっているらしく、会場は温かみのある一体感に包まれていた。見覚えのある顔も多いが、記憶を探るよりも早くに名前を呼ばれて、シャツの袖やズボンの裾を掴まれる。愛想笑いを返しながら、サエの案内に従って奥の席へと座らされた。

「やあ、待っていたよ」

正面から懐かしい声が聞こえて顔を上げる。横分けの髪型にグレーのスーツを着た中年の男が目の前で腰を下ろしていた。かつての担任だったマスザキ先生は、トシアキの記憶ともほとんど変わらない姿でそこにいた。

「お久しぶりです。先生」

「元気そうだな、トシアキ。覚えてくれていたか」

マスザキ先生は嬉しそうに微笑む。彼は親しみを抱かせるためか、当時から生徒を下の名前で呼びかけていた。トシアキの胸の奥から、帰って来た、という感情が湧き起こっていた。

「大きくなったな、君も」
「先生から見ればそうでしょうね。お陰様で」
「飲むだろ？　ビールでいいかい？」
「え？　ああ、ありがとうございます。いただきます」
　トシアキは正座をすると両手でグラスを差し出す。小学校の担任教師から酌を受ける様子が妙におかしくて、楽しかった。
「トシアキにしては珍しく遅刻だな。仕事かい？」
「すみません。香坂町の実家で働いているんですが、今日は朝からちょっと混んでいて」
「なに、頑張っているようで嬉しいよ」
「先生は、今もまだ香坂南小学校におられるんですか？」
「いや、今は滋賀にある羽鳥小学校という私立にいるよ」
「遠くなりましたね。単身赴任ですか？」
「家は元々京都なんだ。だから時間をかけて何とか通っている」
「そうですか……懐かしいですね、先生もみんなも」
「トシアキも皆とは会っていなかったのかい？」
「中学に入ってからも数人とは付き合いがありましたけど、いつの間にかみんな離れてしまいました。高校に行くとほとんどバラバラになりました」
　トシアキはそう返して、軽く辺りを見回す。小中学校で付き合いの深かった友人を探

したが、あいにくこの席からでは見当たらなかった。
「まあ、そういうものだろうな。香坂町を離れた子も多いだろう」
　マスザキ先生も穏やかな表情で場を眺める。
「これを機会に、また君たちが交流を持てるといいな」
「そうですね。先生とも」
「僕か？　僕は構わないさ。君たちが仲良くなってくれればいい」
　マスザキ先生は軽くはにかんで返す。怒ると恐かったが、普段は寛大で優しい先生だった。大人になったサエやケンや、他のクラスメイトたちに対しては、まだどこか過去と現在を一致しきれない感覚が続いている。だが彼に対してだけは、顔を合わせてすぐに親近感を取り戻していた。
「何だか先生だけ変わっていなくて嬉しいです」
「ははは。みんな大きくなったからな。でも僕も昔のままって訳じゃないよ。学校も変わったし、今年で四十二歳の厄年だ。君たちの担任をしていたのはまだ二十七歳だった」
「え、今の俺たちと同じ歳だったんですか」
　トシアキは想像以上の若さに驚く。当時は何となく、父に近い中年の男と勝手に思い込んでいた。今のマスザキ先生は、混じり始めた白髪や目尻の皺も年相応に感じられる。子どもの観察眼はやはりどこか曖昧だ。だから今も昔も変わりがないように見えてしまうのだろう。

「まあ、随分と頼りない先生で悪かったと思うよ」
「いえ。よく指導して頂いたと思っています」
「……ありがとう。立派になったな、トシアキも」
マスザキ先生は満足そうに微笑んでいた。

「やあ、トシアキ。ご無沙汰です」
マスザキ先生が他のテーブルへと移動した後、空いた席に別の男が座る。眼鏡をかけた小柄な姿は、クラス一の秀才セイサクだった。
「……セイサクか。懐かしいな」
トシアキは少しだけ心に壁を作って返事する。北浜清作。彼もケンと同じく、当時はあまり仲の良いクラスメイトではなかった。甲高い声で嫌みったらしく喋る奴。医者の息子で、小学校を卒業した後は彼だけ有名な私立中学校へと進学した。
「十五年ぶりに会うとさすがに先生も老けたよね」
「俺は変わらないなって思ったぞ」
「そう？　そういえば聞いたよ。実家を継いだんだって？」
「まだ継いでいない。俺もこれからどうするか分からない」
「なんだ。ずっとそこで働いているの？」
「帰ってきたのは去年だ。その前は北摂の方の会社で営業をやっていた」

「へぇ。でも力仕事の体になったね。昔はガリガリに痩せていたのに。喘息は良くなったのかい？」
「喘息？　ああ、もう大分落ち着いているな」
トシアキは思い出して深呼吸をする。幼少時代に酷く苦しめられた喘息は、成長するに従い症状も緩やかになっていった。完治することはないが、もう呼吸ができないほどの発作は起きていない。体調に気を付けていれば何の不安もなかった。
「……よく俺の喘息のことを覚えていたな」
「意外だった？　僕は割と印象に残っていたけど」
「あ、もしかして医者になったのか？　セイサクは」
「医者？　ああ、そんなの早々に諦めたよ」
セイサクは落ち着いた様子で答える。
「トシアキの方こそ、よくそんなこと覚えていたね。今は駆け出しの臨床心理士をやっているよ」
「心理士？　うつ病とかを治療をする医者か？」
「医者じゃないって。うつ病とも限らないけど、そういう人たちの相談を受ける仕事だよ。と言っても、今はまだ先輩にこき使われている身分だけど」
「難しそうな仕事だな」
「そうかな。会社員や自営業の人と比べたら楽だと思うよ。トシアキやケンみたいな仕

事、僕にはとても務まりそうにない」
　セイサクは謙遜してそう言う。彼からはよく『八百屋なんてあり得ない』と言っては小馬鹿にされていたが、その頃と今とでは言葉から受ける印象が違っていた。遠くから何やら嬌声が聞こえる。目を向けると女だけが集まり談笑している席が見えた。
「自己紹介はトシアキが来る前に終わったよ。誰が誰だか分かるかい？」
　セイサクがトシアキの視線に気付いて尋ねる。
「男子はあまり変わっていないから分かるが、女子は難しいな。サエとは一緒に来た」
　席にはサエの姿も見える。その左隣にはやや背の低い太った女がおり、さらに隣には派手な女が座っている。右隣にもいくらか目立つ女がいるが、こちらはまだ落ち着いた雰囲気を漂わせていた。
「サエの左にいる小さいのがリコだよ」
「リコか。おっとりしていた奴だな。あれはまだ分かるよ」
　トシアキは十五年前の記憶を辿りながら返す。末原理子。リコはその頃から小太りで愛嬌のある女子だった。
「リコはもう主婦だ。しかも五歳と二歳の子持ちらしいよ」
「結婚しているのか。五歳だって？」
「専門学校を出た後すぐに結婚したらしい。女子は早いね。その隣のナギサも既婚だよ」
「ああ、あれがナギサか」　リコの隣では、髪型の大きなナギサがキャーキャーと騒い

でいる。綱森渚。どうやら先ほど嬌声を上げたのも彼女のようだ。見た目は随分と変わったが、賑やかな性格はあの頃と同じだった。
「ナギサは確か、芸能界で子役をしていたな。その後は聞かなくなったが」
「アイドルにはならなかったみたいだね。ならなかったのか、なれなかったのかは知らないけど。結婚後はダーリン一筋だって言ってたよ。相変わらず騒がしいね」
　セイサクは楽しげにクスクスと笑う。だがトシアキはもう一人の女をじっと見つめていた。作り込まれた茶髪の髪型と、濃い化粧からは、小学生の頃の姿が全く想像できなかった。
「あれは誰だ？　かなりの美人に見えるが」
「分からないだろうね。マミだよ」
「マミ？　あれが？」
　トシアキは女とセイサクとを交互に見る。田室眞美。記憶に残るマミの姿は、ボサボサの頭でどこか薄汚れた制服を着た、肌の浅黒い女子だった。
「……えらく変わったものだな」
「みんな驚いているよ。こっそり聞いたら梅田のキャバクラで働いているらしい」
「ああ、そういうことか」
　トシアキは納得してうなずく。遠目からでも美人と認識できたのは、彼女がそれを商売としているからだろう。赤い唇を動かして、控え目に何かを話している。それを聞い

て他の女たちが笑っていた。
「……大人しくて目立たない奴だったのにな」
「性格も随分明るくなっていたよ。成長したんだろうね、彼女も」
「性格にも成長があるのか？」
「内面という意味ではね。トシアキも結構変わったと思うよ」
「俺はそうでもないだろ。昔からこんなもんだ」
「自分では気付かないものさ。トシアキは落ち着いたというか、うん、やっぱり大人になったと思う」
「セイサクだって」
「ペラペラと悪口を言わなくなったとか？」
セイサクは目を細めて穏やかに笑う。かつての刺々しさはなくなったが、頭の鋭さは変わらないようだ。
「まあ、職業病だろうね。僕は自分で話すより人の話を聞くのが仕事だから」
「臨床心理士か。俺も相談してみようかな」
「今日は依頼が多い。来て良かったかな」
「誰かからもそんなことを言われたのか？」
「守秘義務。でもトシアキは相談なんて全然必要ないでしょ」
「悩みがないように思われてるな。店の売り上げが悪くて大変なんだぞ」

「それは経営コンサルタントか銀行に相談するべきだよ」
セイサクは笑って返す。トシアキは顔をしかめながらも、確かにそうだと納得していた。

「へぇい、ギョウザお待ちぃ！」
店の入口で会った店主のケンが巨体を揺らしながらやって来る。白衣にうっすらと浮いた汗染みを見て、ああそんな奴だったなとトシアキは思い出していた。
「ビールはあるか？　あ、日本酒の方がいい？　おいおい、減ってないじゃないかぁ」
「そんなに食べられないよ。ケンもそろそろ座ったら？」
ギョウザを乗せた皿を受け取りながらセイサクが誘う。
「じゃあそろそろいいかぁ。おおい、あとは任せたぞー！」
ケンが腰を下ろしながら大声を上げると、厨房の方から『はぁい』という若い女性の声が聞こえた。従業員だろうかと思っていると、やがて三歳くらいの女の子が広間に現れてケンの傍に駆け寄って来た。
「おお。こっち来い。お母ちゃんの邪魔になるからな」
「あれ、ケンの子か？　結婚しているのか？」
トシアキは驚いて尋ねる。
「三年前にいきなりだよ、ケンは」
セイサクが代わりに応える。ケンは目を細めて笑っていた。

「そうなんだ。セイサクとケンはまだ会っているのか？」
「腐れ縁だね。僕はこの店の常連だよ」
「あ、可愛い！」
「ねぇねぇ。この子ってケンのお子さん？」
女の子に惹かれたのか、サエやナギサもテーブルに近付いて来る。リコもその後に続き、マミは遠巻きから眺めていた。
「おお。優（ゆう）って言うんだ。優、みんなにご挨拶しな」
ケンは愛おしそうに娘の頭を撫でる。当の女の子はいきなり多数の大人に囲まれたせいか、口を噤（つぐ）み大きな目で見上げていた。
「こんにちは、優ちゃん。パパに似なくて良かったね」
サエが微笑んで話しかける。ケンは自身を貶（けな）されてもははは と笑っていた。
「優、気をつけろよ。このお姉ちゃん、今は美人で優しいけど、昔はすっげぇ恐かったんだぞぉ」
「変なこと教えないでよ」
「どうした、トシアキ。もっと食えよ、まずいのか？」
「食ってるよ。うまいよ。でもケンみたいに早食いじゃないから」
「そうそう。ケンって凄く食べるの早かったよね」
「そうか？　まあ俺、給食好きだったからなぁ」

「いつもはすっごいトロい癖にね」
ナギサが笑いながら皮肉を言う。彼女が動くたびに強い香水の匂いが鼻に付いた。
「トロくねぇよ。俺、全然トロくねぇ」
「ウソ。私覚えてるもん。運動会のあれ、走り綱引き」
ナギサがそう言った瞬間、皆の口からああ、という声が漏れた。『走り綱引き』は、運動会での競技のひとつ。校庭の中央に綱引き用の綱を置いて、左右に分かれたチームが五十メートル走の後に綱引きを行うというものだった。単なる綱引きとは違い、腕力や体重だけでなく走力も必要となる。つまり力のないチームでも足が速ければ先に綱を引くことができ、勝負を有利に進められた。
「ケンってば昔から太ってて足が遅かったから、私たち全然勝てなかったじゃん」
「そんなの、お前らに力がないからすぐに負けたんじゃないか」
「何で私らがあんたを待たなきゃなんないのよ」
「……まあ、そういう点でもよくできたゲームだったんだろうね。あれは」
セイサクが冷静に言って二人をなだめる。
「セイサクはセイサクで、全然役に立たなかったじゃん」
「そうだそうだ。ぼかぁ運動は嫌いだとか言って、いつも適当に練習してたぞぉ」
「君たちねぇ……」
「そういえば、あの競技って他の学校の人たちもやってたのかな？」

サエがトシアキに目を向ける。
「どうかな。聞いたことないけど」
トシアキは隣のテーブルからこちらを見ていたマスザキ先生の方を向いた。
「そうだなぁ。運動会が好きな小学校では取り入れられているね。でも、ただの綱引きよりは動作が複雑だから低学年には向いていないんだよ」
「香坂南小では今もやっているんでしょうか？」
「どうだろうね。僕はもうあの学校のことはよく知らないから」
「先生の今の小学校では？」
「うちは普通の綱引きだ。僕も面白いと思うからやって欲しいんだけどね」
マスザキ先生は懐かしそうに返す。小学校の事情はよく知らないが、彼に運動会の競技を変える権限はないようだ。
「面白かったと言えば、『ウソ作文』ってのもあったよね、トシアキ」
続けてサエが思い出したように言う。
「ウソ作文？　……ああ、あったな」
トシアキも記憶を辿りながら返す。六年生の頃、春の遠足が雨で中止になったことがあった。その折、教室で残念な思いをしている生徒たちに向かって、マスザキ先生は嘘の作文を書くことを提案した。行けなかった遠足を、行ったつもりになって書く。今思うと想像力を鍛える練習だったと分かるが、当時は凄く奇妙で、だが面白い授業だった。

「よく覚えていたね。あれはどこかの学校の先生が考えた授業だよ。僕は何かの本で読んで知っていたんだ」
マスザキ先生が皆に向かって説明する。
「私、あれ凄く悩んで書いたのに、みんないい加減な話ばっかり作ってたんだよ」
サエが言うと、ナギサがきゃははと笑う。
「ナギサなんて滅茶苦茶だったじゃない。いつ間にかクラス全員でミュージカルをやる話にしたんだから」
「全然覚えてなーい。でも面白いじゃん」
「今になるとね。でもあの時は、この子は何考えてんだろって本気で思ってた」
「サエが真面目すぎるんだよ。私、しょっちゅう怒られてたの覚えてる」
「怒られるようなことするからでしょ」
「ほら、また怒られた」
ナギサが肩を竦めると、皆は一斉に笑い声を上げた。あの頃よりも今の方がクラスメイトの仲は良いかもしれない。トシアキはふと気付いて周囲の顔を見回した。
「……そういえば、ヨウジは来ていないのか？」
「ヨウジ？　ああ、トシアキと仲良かった奴か」
ケンも太い首を回して探す。
「あの、ちょっと大人しかった子？　おかっぱ頭で気の弱そうな顔した」

ナギサが尋ねて、セイサクがうなずく。
「ヨウジなら、実家から不参加で返信が来たよ」
幹事のサエがトシアキと皆に向かって答えた。
「来ていないのか。仕事か何かで忙しいのか？」
「電話でお母さんに聞いたんだけど、ヨウジ、今はお仕事で海外に住んでいるんだって」
「何の仕事だ？」
「コンピュータのソフトウェア開発だって。私には全然分からない分野だけど」
「ふうん。凄いな」
トシアキは感心したふうにうなずいた。地元の商店街にいる身としては、海外の仕事と聞いただけで優秀な人物のように感じられる。昔からテレビゲームが好きな奴だったと思い出していた。
「不参加と言えば、転校したキョウスケは葉書も着かずに戻って来ちゃった」
続けてサエが言うと、周りからおお、と思い出すような声が漏れた。トシアキはキョウスケの姿、背が高く、日に焼けたスポーツマンの男子を思い浮かべる。篠見京介（しのみきょうすけ）。一学期の終わりに転校していったクラスメイトだった。
「キョウスケも来られなかったんだ。会いたかったのになぁ」
ナギサは残念そうな声を上げ、その後はキョウスケの話題と再び小学校の思い出話へと戻った。トシアキはビールを一口含んで、グラスの縁をじっと見つめる。滝要次（たきようじ）。ヨ

ウジが不参加なのは、海外にいるという理由だけではないかもしれないと思っていた。
最初は皆との再会に遠慮を覚えていたトシアキも、いつの間にか共に語り合い、笑い合うようになっていた。十五年の月日が流れても、古い付き合いの記憶は頭の奥底で眠り続けている。まるで久しぶりに自転車に跨（またが）った時のように、走り出すとすぐに乗りこなす感覚を取り戻すことができた。サエが言っていたように、参加したクラスメイトの数が多いのも良かったのだろう。あらかたの者たちと顔を合わせて連絡先を交換した頃、傍にいたサエがおもむろに座敷を立ち上がった。
「はい。みんな委員長に注目ー」
ナギサの高い声が響き皆は振り返る。サエは少し照れ臭そうに笑っていた。
「……ええと、今日は皆様にお集まりいただき本当にありがとうございました。話も尽きないかと思いますが、時間もありますので、ここで一旦、中入りとさせていただきたいと思います」
サエはそう宣言して皆を見回す。気が付けば、始まってからもう数時間が経過していた。
「それで、この後は店を出て、いよいよ私たちの香坂南小学校へと向かいたいと思います。待っていた方もおられるでしょうが、タイムカプセルの開封式を行います。時間のある方はぜひご参加ください。よろしくお願いします。以上です」
「よっ、委員長！」

ケンが大声を上げて手を叩く。それにつられて皆も笑顔で拍手をしてから、一斉に席を立ち始めた。トシアキも身支度を調えて腰を上げる。途中でサエと目が合うと、彼女は微笑んで首を傾げた。『もちろん行くよね？』と尋ねられたような気がしたので、小さくうなずき返しておいた。

三

香坂南小学校はケンの店から歩いて十数分の所にある、見晴らしの良い高台に建っている。トシアキたちは宴会の席での盛り上がりを絶やさないまま、列をなしてかつての通学路を歩いていた。あの頃、なけなしの小遣い金を手に訪れた駄菓子屋はコンビニエンスストアに変わり、飼い犬と散歩をした休耕田には近代的なマンションが建っている。よく下校途中に集まった公園はそのままだが、砂場は野良猫などが入り込まないよう柵が設けられていた。変わらない景色と、変わってしまった景色。その一つ一つをクラスメイトと指をさして確かめ合う。小学校に辿り着く頃にはもう日は大分傾き、夕焼けの空に胸を打つような郷愁を感じた。

「本当に懐かしいな……」

トシアキは西日を受けて赤みがかった校舎を見上げてつぶやく。土曜日の学校に人気

はなく、ひっそりとした寂しげな雰囲気を漂わせていた。集まった十数人のクラスメイトも皆、感慨深げな表情で眺めている。宴会の後、予定のある者は先にケンの店の前で別れた。所帯を持つナギサやリコも既にこの場にはいなかった。

「懐かしい？　商店街の実家に住んでいるなら近所じゃないの？」

独り言を聞いたサエが隣から尋ねる。

「近所にあっても行かないからな。小学校ってこんなに小さかったか？」

「トシアキが大きくなったんだよ」

「それもそうか。ここは何も変わらないしな」

「いや、変わった所もあるみたいだよ」

話を聞いたセイサクが近付き昇降口を指さす。見れば入口は何も変わらないが、両端に植え込まれた垣根の中に黒い棒のような物が新しく立てられていた。

「何だ？　あれ」

「赤外線のセンサーだと思う。さらに上には監視カメラみたいな物まである。不審者侵入対策ってところだろうね」

「……何だか世知辛いな」

「子どもが危ない世の中だからね。その先のガラス扉も僕らの頃から新調されている」

「本当だ。俺たちの頃はかなり古くて、鍵が掛かっていてもガチャガチャ揺らしたら開いたよな」

「今思うとかなり不用心だったね。開けっ放しなんて信じられないよ」
セイサクは眼鏡の奥の目を細める。トシアキはその意見に同意しつつも、そう思えてしまう時代の変化に虚しさを覚えていた。
「トシアキ、セイサク、行くよー！」
いつの間にかサエが皆を引き連れて校庭へと向かっている。トシアキとセイサクは軽く目を合わせてから、校舎に背を向けて歩き始めた。

校庭を眺めて初めに感じたのも、やはりこんなに狭かっただろうかという違和感だった。深緑の桜並木に囲まれた敷地は中学や高校、大学のグラウンドと比べるとコンパクトにまとまっている。鉄棒や雲梯（うんてい）、登り棒や半分埋まったタイヤの遊具などが設置されているのも小学校だけだった。小さなサッカーゴールの前では数人の子どもたちがボールを蹴り合って遊んでいる。近所に住む生徒たちなのだろう。彼らは突然現れた大勢の大人たちを不思議そうな目で見ていた。
「トシアキ、タイムカプセルを埋めた場所って覚えてる？」
マスザキ先生と共に先頭を歩くサエが振り返る。
「確か、桜の木の下とかじゃなかったか？」
トシアキは彼女に近寄りながら答える。もうほとんど覚えていないが、何となくそんな気がしていた。まさか校庭の真ん中に埋めたとも思えない。目印もいるだろう。

「当たり。凄いじゃない。旧校舎から数えて五本目の桜。西側の地面だよ」
「旧校舎って言葉も久しぶりに聞いたよ。サエの方こそ、よくそこまで覚えていたな」
「昔の日記に書いてあったの。あとマスザキ先生も手帳に控えてくれていたから間違いないよ」
「その癖、サエに言われるまで十五年後のことはすっかり忘れていた。ダメな先生だよ」
隣を歩くマスザキ先生が苦笑いする。校庭の先には木造二階建ての古めかしい旧校舎が見えていた。トシアキたちがここで授業を受けたことはない。夜になると幽霊が出ると噂し合ったくらいしか思い出はなかった。
「あの旧校舎って、どうして使いもしないのに残しているんだろう」
「そういえば不思議だね。なくした方が校庭も広くなるのに」
トシアキの言葉にサエも賛同する。
「なくせない理由があるって聞いたことがあるよ」
マスザキ先生が思い出すように話す。
「香坂南小学校は創立百年を超える歴史ある学校だけど、昔は地元の人たちがお金を出し合って運営していたんだ。あの校舎もその当時の何代目かに建てられたもので、つまり国や市が建てたものじゃない。だから学校側も簡単に壊すことはできない。保存会の方々が残しておいて欲しいと言っているから、そのままにしているそうだよ」
「そんな事情があったんですか。でも残しておいてもしょうがないと思うけどな」

「やっぱり自分たちが通っていた小学校だから壊して欲しくないんじゃないかな」
サエは旧校舎を見つめながら言う。トシアキは先ほど自分たちの校舎を見上げた時の懐かしさを思い返していた。
「おいおい、サエ。そういやどうやって掘り返すんだ？　俺、何も持ってきてねぇぞ」
後ろを歩くケンが声をかける。サエは首だけを回して振り返った。
「旧校舎の裏にある体育倉庫からシャベルを借りるよ。ケン、鍵借りてるから取って来てよ」
「分かった。セイサク行こうぜ」
鍵を受け取ったケンはセイサクと共に旧校舎へと向かう。トシアキたちはタイムカプセルを埋めた桜の木の下に集合した。
「ここの下に埋めたのか？」
トシアキは靴の爪先で地面を掘りながらサエに尋ねる。彼女は曖昧にうなずいた。
「旗でも立てておけば良かったね」
「十五年も経ったからな。掘り返してみて、もし出てこなかったらどうするんだ？」
「私もそれが心配。まあその時は諦めるしかないよ」
「なんだ。結構、気楽に考えているんだな」
「そりゃ見つかった方がいいに決まっているよ。でもどうせ手紙とか写真とかを入れただけだもん。なくても諦めはつくよ。それに私は、今日みんなで集まれただけでもう満

足しているから」
サエは笑顔を見せてそう言う。トシアキは納得したふうにうなずいてから、出席率の高いクラスメイトたちを軽く見回した。確かに、単なる同窓会ではなく『十五年前の約束』としたからこそ、皆も積極的に参加したのだろう。わずかに顎を上げると、集団からやや離れた所に立つマミと目が合った。
「……久しぶりだな、マミ」
「本当に。元気そうね」
マミは嬉しそうに微笑む。やはり他の誰よりも女らしくなっているが、声の響きは昔と変わらない気がした。
「みんなから言われただろうが、随分変わったな」
「そう？　でもいじってないよ」
「じゃあ元が良かったんだ」
「いえいえ。トシアキも格好良くなったね」
「俺は変わらないさ」
「私、トシアキに会いたくて来たんだよ」
「……なんだよ、それ」
トシアキはわずかに戸惑いを覚える。マミは含み笑いを漏らしていた。
「……まあ、俺もみんなに会えて嬉しいよ。参加者が少なかったらどうしようかと思っ

てた」
「でもヨウジは、来てないんだね」
「今は海外に住んでいるらしいな。あいつにも会いたかったが」
「……地元にいても、来たくなかったんじゃない？」
マミは大きな目でトシアキを見つめる。
「……そうかもしれないな」
トシアキは目を逸らして視線を避ける。ケンとセイサクが柄の長いシャベルを手に戻って来たので、いよいよタイムカプセルの発掘作業が始まった。

トシアキ、ケン、セイサクの三人が中心となり、三本のシャベルを使って地面を掘り進めてゆく。サエの日記やマスザキ先生の手帳には五本目の桜の西側としか書かれておらず、それ以上に正確な場所は誰の記憶も曖昧ではっきりとはしなかった。発掘作業は途中、他の男たちとも交代しながら続けられる。ベージュ色の乾いた地面は掘り返すに従って、次第に黒く湿り重みを増していった。
「どれくらいの深さに埋めたんでしょうか？」
トシアキは手を休めずにマスザキ先生に尋ねる。彼も最初は穴掘りを手伝うつもりだったようだが、教え子たちから恩師に作業はさせられないと言われて、立会人として見守っていた。

「そんなに深くはなかったと思う。恐らく一メートルくらいじゃないかな」
「えぇ、そんなに？　もっと浅くても良かったんじゃないのぉ！」
ケンはシャツの袖で大汗を拭いながら叫ぶ。
「すまないね。あまり地表に近いと外界の影響を受けてカプセルの劣化が早くなるんだよ。本当は二、三メートルほど深い方が地中の状態も安定して良いらしいけど、あの頃は僕もそこまで掘れなかった」
「……参ったね。完全に運動不足だ」
セイサクが息を切らしてあえぐ。
「昔は、せめてトシアキよりは体力があるつもりでいたんだけどね」
「八百屋を舐めるなよ」
「まったくだよ。自分が情けなくなる」
「セイサク、交代するよ」
心配してサエが声をかける。
「セイサクだってもう先生なんだから、体壊しちゃだめだよ」
「いや、いいよ。服も汚れるからサエはやらない方がいい」
「そんなの気にしないよ。みんなも手伝って」
サエは作業を眺めていた女たちに呼びかける。皆も快く了解して穴を取り囲む輪を縮めた。トシアキもシャベルを奪われて無理矢理に休憩を取らされる。小学校に帰ってき

たせいか、誰もが小学生のように無邪気だった。

　進展があったのはそれから十数分後。いくら掘っても土と石以外には何も現れず、そろそろ発掘ポイントを変えてみようかと相談を始めたところだった。何度かの交代の後、一番深くまで掘り進めていたケンがふいに作業の手を止めた。

「おいおいおい！　なんか出てきたぞ！」

　ケンが穴に向かって声を上げる。皆が覗き込むと、底から少しずれた壁面に、グレー色をした球体の頭が見えていた。

「これかぁ？　これがタイムカプセルか？」

「……うん。見覚えがあるな。多分そうだよ」

　先生がそう認めると、周囲はにわかに盛り上がった。

「よし、掘ろう掘ろう」

　ケンは俄然やる気を見せて掘る速度を上げる。トシアキとセイサクは穴の周囲を広げつつ、土を外へと掻き出し続けた。埋もれていた物体は次第に露わとなり、ステンレス製の丸いカプセルが姿を見せる。ああ、こういう物だったなとトシアキも思い出していた。

　周囲の土がほとんど掘り返された所で、ケンは両手で力任せにカプセルを引き抜く。地面に投げ出された瞬間、クラスメイトたちは歓声を上げて拍手した。

「よぉし！　出たぞぉ！」

「お疲れ様。見つかって良かったね」

　サエも手を叩いて発掘者を讃える。見つからなければ諦めると言っていたが、やはり嬉しそうに微笑んでいた。トシアキはタイムカプセルの前にしゃがみ込んで土を払う。十五年前の七月に埋めたカプセルが、何も変わらずここに存在している。鏡のような表面には、すっかり変わった男の顔が間延びして映っていた。

「よく無事に埋まっていたもんだな」

「先生が言った通り、深くに埋めたから割と綺麗に残っていたな」

　ケンは掘り返した土の山にシャベルを突き立てる。

「中身も傷んでなければいいけどね。湿気が心配だよ」

　セイサクも興味深げにタイムカプセルを見下ろしていた。

「じゃあ早速、開けてみようか」

　サエが皆を見回し呼びかけた。

「でもこれ、どうやって開けるんだ？」

　トシアキはタイムカプセルの頭を叩く。球体の中央には繋ぎ目が帽子のように鍔立っており、その繋ぎ目に沿って六箇所ほどボルト留めされていた。

「ボルトと南京錠で閉じられているはずだよ。スパナは私が持ってきた。鍵はマスザキ先生がお持ちですよね」

「ああ。ちゃんとここにあるよ」

マスザキ先生はポケットから銀色の鍵を取り出す。トシアキはそれを確認してから、タイムカプセルを転がして南京錠を探し始めた。ボルトの列が鍔を一周している。
「……南京錠って、どこにあるんだ？」
「あれ、ない？」
サエもしゃがみ込んで確認する。タイムカプセルは滑らかな球状をしており、ボルトで留められている鍔の他には開きそうな部分はない。なおも転がしながら探していると、ボルトの列の一箇所に小さな穴が開いているのに気付いた。
「あ、ここに掛けられていたのか？」
「そうみたい。でも鍵がないよ。何で？」
「俺に聞かれても……本当にそんな物が付いていたのか？」
「ここにあるぞ」
背後から声が聞こえて振り返る。ケンが掘り返した穴から何やら金属の部品を拾い出していた。
「穴の底に落ちていたけど、これじゃないのか？」
「……うん。多分これだな」
部品を受け取りながらトシアキが言う。タイムカプセルと同じ銀色をしたカバン型の南京錠だった。サエも隣から覗き込む。
「鍵が開いていたの？」

「いや、ツルの途中からちぎれている。どういうことでしょうか、先生」
トシアキは近付いて来たマスザキ先生に南京錠を手渡す。
「……何とも言えないけど、土の重みと湿気で劣化したのかもしれないな。タイムカプセルの穴と擦れて傷が付いて、そこから錆びて脆くなったのかな。普通じゃ考えにくいけど、なにしろ十五年も土の中にあったからね」
マスザキ先生の説明にトシアキも一応納得する。確かに、タイムカプセル本体はその特殊な形状も含めて頑丈そうだが、付属されていた南京錠は普通に売られているものと変わらない単純な作りに見えた。
「まあ、壊れていたのが鍵だけで済んで良かったじゃない。それじゃ改めて、開けてみましょう」
サエはそう言うと手に持つスパナをトシアキに手渡した。
「俺が開けるの？」
「ちょうど近くにいるからね。どうぞ」
トシアキはスパナを受け取る。ボルトの寸法に合わせて幅を調節できるモンキーレンチという物だ。タイムカプセルが転がらないように足で押さえて、スパナをボルトに噛み合わせる。
「トシアキ、気を付けた方がいい。ボルトが腐食していたら頭だけが取れるよ」
セイサクが適切なアドバイスを入れる。トシアキも慎重に力を込めてボルトを回した。

幸いにもそれほどきつくは締められてはいない。十五年前のマスザキ先生が開ける時のことを考えてくれていたのだろう。やがてボルトが全て外れると、球体は二つに分かれて口を開く。それと同時に、封筒の束もばさばさとなだれ落ちた。周囲からは再び歓声が起き、タイムカプセルを取り巻く輪が狭まった。

「おほぉ、出てきた出てきたー」

ケンが嬉しそうに手を叩く。

「結構、状態もいいようだね」

セイサクも眼鏡を整えて見下ろす。白い封筒は全体的にくすんでいるが、濡れたり破れたりはしていなかった。

「あれ、でもおかしくない？」

ふいにサエが不思議そうに声を上げた。

「おかしいって？」

トシアキは顔を上げて彼女を見る。

「……何で、封筒が出ているの？」

「え？」

タイムカプセルから零れ落ちた封筒の束。だがその一つは封筒ではなく、中に収めていたはずの白い手紙が開いていた。

「……本当だ。一枚だけ開いている。封筒の糊が剥がれたのかな」

「一枚だけじゃないよ。全部出ているんだよ」

「え、何で？」

「だって全部、乾燥剤と一緒にビニール袋に入れておいたはずだよ」

「そうなのか？」

トシアキの頭の中にはもう、その頃の光景はほとんど残っていない。マスザキ先生の方を向くと、彼も怪訝そうな表情を見せていた。

「……うん。確かにそうだね。タイムカプセルで一番心配なのは、手紙や写真が湿気と細菌で腐食してしまうことなんだ。本当は内部の空気を抜いて真空にすればいいんだろうけど、さすがに小学校でそこまではできない。だから、乾燥剤を入れて可能な限り湿気をなくそうとしたんだ」

「……それなら、逆に乾燥し過ぎたせいで糊が剥がれることもあるんじゃないですか？」

「それはあるだろうね。でも、口を縛っておいたビニール袋が自然に解けることはないよ」

「じゃあ、どういうことだ……」

「手品みたいなことになってんなぁ」

ケンがぼんやりとした声で言う。だがトシアキは、それ以上に薄気味悪さを感じていた。

「トシアキ、その手紙って、誰の？」

サエが落ちた手紙を指さして尋ねる。いつの間にかビニール袋から出て、封筒からも抜け落ちていた手紙。トシアキは無言のまま拾い上げて、ゆっくりと開く。その瞬間、

思わず顔がこわばった。
「……桧垣、竜太」
クラスメイト全員の、息を飲む音が聞こえた。
「リュウタだ……」
トシアキはつぶやく。それは忘れていた、いや、思い出したくなかった名前だった。
「リュウタって、あの、やんちゃだった子？」
サエの問い掛けにトシアキとセイサクとケンがうなずく。リュウタはいわゆる『いじめっ子』と呼ばれる男子だった。体も態度も大きくて、力も強い。先生の言うことも聞かず、乱暴で、手の付けられない子どもだった。喘息持ちで体の弱かったトシアキや、臆病者だったヨウジは格好の標的として虐められ続けた。
「どうして、リュウタの手紙が……」
トシアキは無意識の内に、リュウタの存在を頭から消していた。名前を聞くだけでその姿が脳裏に浮かび、暴力によって痛めつけられた記憶が甦る。植え付けられた恐怖心は、十五年経っても拭いきれなかった。
「リュウタ……何が、書いてあるの？」
サエも戸惑いの表情を見せている。トシアキは手紙に書かれている文章を見るが、そこで再び体が固まってしまった。
「……どうしたの？　トシアキ」

「うん……」
そこには信じられない文章がしたためられている。やがて皆が不安げな眼差しを向けていることに気付いたので、口を開いて静かに手紙を朗読した。

『十五年後のわたしへ』

桧垣　竜太

十五年後、おれはみんなに謝りたい。
それは今おれが、みんなにひどい事ばかりして、迷わくばかりをかけているからだ。
えらそうな顔で男子に乱暴して、女子をからかっている。
同級生なのに子分みたいにして、いばりまくっている。
きっとみんな、おれをこわがって、じゃまなやつだと思っているにちがいない。
口には出さないけど、死んでほしいと思っているだろう。

おれは、本当はみんなと友達になりたい。
でもおれには、友達の作りかたが分からない。
だからいつも、みんなをむりやり子分にすることしかできないんだ。

本当はそんな事はしたくない。でも、ほかにどうすればいいのか分からない。今、謝る事もできない。みんなに無視されるのがこわいんだ。

十五年後、おれは正直でまじめな男になりたい。
この手紙を開ける時に、みんなに会って謝って、許してもらいたい。
おわびの金なら、いくらでもある。
正直にごめんなさいと言って、そして今度こそ、本当の友達になりたい。
未来のおれよ、必ずそうしてくれ。
もう、こんなに苦しい思いをするのはいやなんだ。

誰も、何も言わなかった。想像していたものとはまったく違う手紙の内容に、皆は動揺を隠せなかった。

六年二組を暴力で支配していたリュウタ。そんな彼が、十五年後の自分に向けて、こんな手紙を書いていた。皆を虐めていたことを謝罪し、本当の友達になりたい。それはトシアキが記憶するリュウタの態度とは似ても似つかない言葉だった。

「トシアキ……」

黙っていても仕方がないと思ったのか、サエが口を開く。

「……みんなの手紙も、渡していこうか」

「……ああ、そうだな」

トシアキはリュウタの手紙を脇に置いて、皆の封筒を取り出していく。名前を呼んでそれぞれに手渡していった。トシアキも自分の名前が書かれた封筒を手に取る。糊付けされていたはずの口が開いていた。

「封筒が、開いている」

「うん。私も」

その言葉にサエが反応し、その後も次々とクラスメイトたちが同様に申告する。どうやら全員の封筒が開いていたようだ。

「やっぱり糊が乾いたからか？　でも……」

何かがおかしい。タイムカプセルの中には他に、大量の乾燥剤と空のビニール袋が入っている。封筒を入れておいたはずの物だった。さらに底の方には、『桧垣竜太』と名前の書かれた封筒が一つ残されている。もちろん手紙は外に出ていたので、中には何も入っていない。そう思って指先を入れると、手紙とは違う紙の感触があった。

「あれ？」

不思議に思って紙を取り出す。それはなぜか、一万円の紙幣だった。

「お金？」

サエが自分の手紙から顔を上げる。

「リュウタの封筒の中に入っていた」
「どうして？　本物？」
「本物だよ」
「……それが、おわびの金、なのかな？」
「ああ、手紙に書いてあった奴か」
　正真正銘の一万円札。これが皆に許しを得るための金のつもりだったのか。首を捻りながら裏返すと、透かしの部分に鉛筆で不思議な数式が書かれていた。
「９・１－２＝５６４」
「え、何？」
「ほら、お札に書いてある」
「本当だ。何これ」
「何だろう……」
　意味が分からなかった。９・１から２を引いて、なぜ５６４になるのだろう。また、なぜそれを一万円札に書いて、十五年後に開かれるタイムカプセルなどに入れていたのだろう。
「ねぇ、トシアキ」
　考え込むような表情でセイサクが声を上げる。
「さっきの手紙、本当にリュウタが書いた物なのかい？」

「ああ。そう名前が書いてある」
「そうじゃなくて、すり替えられたってことはないかな？」
「どういうことだよ。タイムカプセルに入って地面に埋まっていたんだぞ」
「でも、封が開いていたじゃない。これは自然現象じゃないよ」
　セイサクは鋭い眼差しを向ける。トシアキはややためらった後、改めてリュウタの手紙を開いた。
「……本物だと思う。俺たちの手紙と同じくらいに紙も古くなっているし、字も小学生が書いたみたいだ」
「じゃあ何で、リュウタの手紙だけが封筒から出ていたんだろうね」
「リュウタだけじゃない。みんなの手紙だって、ビニール袋から出されて封筒の口も開いていた」
「そういや、鍵も壊れていたよね……」
　サエも細い指を顎にかけてつぶやく。
「誰かが、私たちより先にこれを掘り返したんじゃない？」
「……手紙を見るためにか？　誰がどんな理由で、こんな大変な作業を？」
「おかしいよね。しかも蓋を閉めてもう一度埋め直したなんて」
　先程までの楽しい雰囲気は一変し、クラスメイトたちの間には重苦しい空気が流れていた。何が起きたのか分からない。ただ、得体の知れない何かが起きたことは間違いな

かった。
「気にすんなよ。何もなくなっていないなら、いいじゃねぇか」
ケンはそう言って大きく溜め息をつく。
「とにかく、リュウタはそんな手紙を残していたんだよな。俺にはそっちの方がショックだよ。そんなこと考えていたなんて全然知らなかった」
「僕も、ずっと一緒にいたのに……」
セイサクもそう言ってうなずく。彼とケンはリュウタから子分のように扱われ、いつも三人で連んでいた。トシアキが彼らを嫌っていた理由のひとつだった。
「リュウタ、可哀想だったね」
サエはトシアキの持つリュウタの手紙を軽く撫でる。もちろん、虐められていたトシアキも、彼の本心には一切気付いていなかった。
「……でも、今さらね」
物悲しさが漂う中、つぶやくような声が聞こえてトシアキは顔を上げる。取り囲むクラスメイトの中、遠くに立っていたマミが暮れゆく空を見上げていた。
「奥に入っているのは、写真？」
サエに言われてトシアキは顔を戻す。タイムカプセルの底には、ラミネート加工が施された十数枚の写真が収められている。トシアキは慎重な手付きで取り出すと、一番上にある全員の集合写真に目を落とした。中央辺りに座る貧弱なトシアキの背後に、大柄

なリュウタが立っている。顎をやや上向けたふてぶてしい表情。だがこの写真が撮影された頃、彼は誰にも知られずにあのような手紙を書いていた。
「リュウタ……」
トシアキはマミの言った、『今さらね』という言葉を頭の中で復唱する。彼女がどういう気持ちで言ったのかは分からないが、『今さら』であるのは紛れもない事実だった。そう、今さら自分たちに謝っても仕方がなかった。
なぜならリュウタは、すでに十五年前に死んでいたからだ。

四

『リュウタの死』
十月五日　木曜日

夏が過ぎ、日の暮れが早まりだした十月の夕刻。赤く染まった空の下で、香坂南小学校の制服を着たトシアキが早足で歩いていた。右手に握るリードが強く引かれ、その先では柴犬のシバが駆け足でトシアキを先導している。人通りは少なく、遠くを走る車の

音が波となって耳に届く。自転車に乗った下校途中の中学生たちがちらりと目を向けて通り過ぎて行った。

「シバー、早いよー」

トシアキは息を乱しながら声を上げる。だがシバは聞く耳も持たずに、先へ先へとリードを引っ張り続けた。家では大人しい犬だが、散歩となると嬉しさが我慢できなくなるらしい。時折トシアキを振り返っては、顔を上げて急かすように吠えていた。

やがて道を外れて広い休耕田に入ると、シバは踵を返してトシアキの足にまとわりつく。ここに着くとリードを外してもらえると知っているからだ。

「分かったよ。今外してやるから、じっとしてよ」

トシアキは柔らかい首を掴んでリードを外す。シバは数歩歩いて繋がれていないことを確かめると、喜びを全身で表すように辺りを駆け回り始めた。トシアキは一緒に走らずに立ち止まって、無邪気な飼い犬の姿を目で追いかける。田畑の多いこの辺りは目を遮る物が少なく、遠くの方まで広く見渡せる。休耕田の果てはやや小高い丘に繋がり、その上では鉄道の架線が一直線に走っていた。

「あんまり遠くに行っちゃだめだよ」

シバはトシアキの家で飼われているオスの柴犬だった。赤褐色の短毛に均整の取れた体格。立った耳と巻いた尻尾を持った九歳の成犬だ。りりしく利口そうな顔、というのはトシアキの贔屓目かもしれないが、実際に躾にも従順な賢い犬だった。

「何が面白いのかな。毎日同じ場所なのに」

トシアキは土の地面を踏みしめながら、ゆっくりとシバの傍へと向かう。この休耕田は毎日の散歩で訪れる遊び場のひとつだった。シバは店にいる時は常にリードに繋がれて、自由に歩き回れない。暴れたり店の野菜や果物に手や足を出すことはないが、それでも店に来る客の中には犬を恐がる人もいるので放っておく訳にはいかなかった。だからせめて、散歩の時くらいは好き放題に走らせてやるようにしていた。

「明日は晴れるのかなぁ、シバ」

トシアキは赤いフィルムを通したような世界を眺めながら、ぼんやりと呼びかける。シバは同意するように一声吠えたが、それは恐らく名前を呼ばれて返事をしただけだった。激しく息を乱して駆け回っては、小虫を追ったり土を掘ったりしている。体が弱く、喘息のせいで息が切れるだけでも不安を抱くトシアキは、元気なシバをいつも羨ましく思っていた。

やがてシバはトシアキの傍へと駆け寄ってくる。その口には、何か棒のような物をくわえていた。

「どうしたの？　何か見つけてきたの？」

シバは他人の物を取ったりはしないが、たまに地面に落ちている物を拾ってくる癖があった。トシアキはその場にしゃがみ込むと、得意気な表情をしたシバの顔を撫でつつ口からその棒を受け取った。鉛筆よりも少し太くて短い、銀色の筒。片方は閉じられて

おり、中は空洞となっていた。
「……パイプだ。何かの部品かな？　よく分かんないけど」
シバの顔と、その先の地面に目を向ける。他には特に何も見当たらなかった。
「誰かが落としたのかな。こんなのいらないよね」
そう言ってパイプを軽く放り投げる。しかしその動作を勘違いしたのか、シバは再び口で拾い戻って来た。
「遊んでいるんじゃないよ……欲しいの？」
トシアキはシバに向かって尋ねる。目を潤ませて小刻みに震える顔がうなずいているように見えた。
「そう……じゃあおみやげにしようか」
トシアキは立ち上がるとパイプをズボンのポケットにしまった。シバはたまに見つけてきた物をなかなか離さないことがある。そういう時にはトシアキは、家まで持ち帰って保管するようにしていた。日付を書いたラベルを貼り、缶製の菓子箱で作った『シバのおみやげ箱』に入れておく。ガラクタばかりなので使い道もなく、シバもこだわっていた割にはすぐに忘れてしまう。それでもお互いの約束として残しておくことにしていた。
「今日はもう他の物は拾ってきちゃダメだよ」
トシアキがそう言い聞かすとシバは再び遠くに向かって走り出す。徐々に暗みを増し

てゆく街を見ながら、今日は素直に帰ってくれるだろうかと考えていた。
「シバなら勝手に家まで帰ってきそうだけどね」
左の遠くから、踏切の遮断機の下がる音が聞こえる。右の遠くからは電車が通る前の、シンシンとしたレールの音が聞こえ始めていた。前方に見える線路はこの休耕田と地続きになっており、特に柵のような物も設けられていない。とはいえ、何度もこの場所を訪れているシバがそこへ近付くことはなかった。
「シバー、電車が来るよー」
トシアキはそれでも一応シバを呼ぶ。だがその声はすぐにやって来た音に掻き消された。緑色をした巨大な蛇のような電車が遠くの線路を通過する。
その時、叫び声のような金属音が街に響き渡った。
「何？」
トシアキは思わず両手で耳を塞ぐ。騒音は物寂しげな風景を切り裂くように長く続き、やがて消え去った。目を向けると、通過するはずの電車が貼り付いたようにその場で停止していた。
「電車が、止まっている？」
トシアキは茫然とした表情で目の前の風景を見つめる。何が起きたのか理解できなかった。騒音は電車が急ブレーキをかけたせいで鳴り響いたのだろう。では、なぜ急ブレーキをかけたのか。冷え始めた夜の風が体を通り抜ける。それとともに、激しく吠える

犬の鳴き声が耳に届いた。
「シバ！」
トシアキは慌てて電車に向かって駆け出した。シバは線路に入らない。鳴き声も聞こえている。それでも姿を見るまでは安心できなかった。呼吸が激しくなるにつれて、喉の奥に濁りを感じる。やがて電車の三両目あたりで、こちらに背を向けて威嚇を続ける柴犬の姿が見えた。
「シバ！　戻ってこい！」
トシアキは消え入りそうな声で呼ぶが、シバは気付かない。轟音を立てて急停止した電車に激しく怯えているのだろう。ようやく辿り着くと、そのまま腰を落として抱き締めた。
「落ち着け、シバ！　大丈夫だよ！」
トシアキは雑音混じりの声で話しかける。だが顔を上げて正面を向いた時、飛び跳ねるほど体が震えた。
電車から草むらに沿って、真っ赤な血液が飛び散っていた。
「シバ！」
トシアキは驚いてシバの体を見回す。だが四肢を伸ばして立つその姿に怪我は見当たらず、滑らかな毛も汚れてはいなかった。シバは無事だ。改めて前を向くと、おびただしい血の他に、何かの布切れや塊が落ちている。靴やカバンのような物もある。そして、

五本の指を持つ手が転がっているのを見つけた。
「……腕だ、人間の……」
トシアキは目が離せなかった。土の上に赤い人間の腕がある。肘の手前でちぎれ、血溜まりに浸かっている。それより先は見当たらないが、気が付けば至る所に肉片のような塊が散らばっていた。
「人を撥ねたんだ……」
叫び声の代わりに、ヒューという音が喉から漏れた。足に力が入らず、シバに寄りかかったまま動けなくなっていた。辺り一面に分断された人間の死体がある。人を撥ねて電車が停車したのだと分かった。見上げると、窓の向こうから大勢の大人たちがこちらに目を向けている。運転室を出た制服姿の男が、草むらの中で立ち尽くしていた。
「何で、こんな所で……」
トシアキは再び近くに目を向ける。誰かが線路を横断しようとして撥ねられたのだろう。見たくはないのに、視線はどうしても落ちた腕の方に向いてしまう。改めて見ると思ったより小さい。トシアキの腕よりは長く太いように見えるが、大人ほどではない。子供なのだろう。この辺りに近付くことは小学校でも厳しく禁止されている。その言い付けを破ったがために、恐れていたことが起きてしまったのだ。シバの体に抱き付いたまま、赤い腕から目を離す。
子供の頭が、じっとトシアキを見上げていた。

「ひっ」

トシアキの顔が硬直する。髪の短い男子の頭がすぐ近くに落ちていた。額から血を流し、見開いた目が真っ赤に充血している。そして首の先からは何も存在しなかった。目を離すことができず、その光景が恐怖とともに脳裏に焼き付く。血に塗(まみ)れているが、その歪んだ表情には見覚えがあった。

「リュウタ、なの……」

そうつぶやいた瞬間、トシアキは激しく咳き込んだ。乾ききった喉が発作を引き起こしてしまった。息を吸うと、むせ返るような血の匂いがさらに喉を刺激する。シバの隣で手と膝を着き、咳と呼吸を繰り返した。頭の中で、落ち着け、落ち着けと言い続ける。目から涙が零れ落ち、心臓が恐怖に震えていた。

「嘘でしょ……」

クラスメイトのリュウタが死んでいる。悪口と腕力でトシアキたちを虐め続けていた男子。大きな体はバラバラになり、頭だけになった顔がこちらを見上げていた。どうしてこんな所にいたのか。なぜこんなことになったのか。しかしそれを考える余裕はなかった。シバは主人の危険を察したのか、トシアキの目を隠すように前に立つ。そしていたわるように柔らかい腹を顔にすり寄せてきた。そのぬくもりに、さらに涙があふれた。

今日、リュウタが電車に撥ねられて、死んだ。

五

同窓会から三日後の夕刻。青果店『アイバヤ』の奥で段ボールをたたんでいたトシアキは、ふいに耳に届いた母の声に顔を上げた。店先で春菊を束ねる太い後ろ姿が見える。自分に声をかけた訳ではない。相手の顔はよく見えないが、恐らく買い物に来た近所の主婦と話をしているようだった。

「それでね、箱の中のものが全部だめになったのよ」

「ええ、全部なの？」

「今朝、お弁当屋さんに出したキャベツにね、一玉だけ青虫が付いていたのよ。一玉だけ、一匹だけよ。それなのに箱の八玉とも全部持って帰れって言われたのよ」

「まあ酷い。他は問題なかったんでしょ？」

「それだって問題ないわよ。どうせ調理して出すんだから。そう言ったのに、規則だからの一点張り。他の店でお弁当に虫が紛れ込んでいたことがあったんだって。それで本部から厳しく言われているとか」

「ふうん。何だか頼りない店長さんね。他の店のことなんて知らないわよねぇ」

「でしょ？　だから私もう頭に来ちゃって、もういいです、こんな店こっちから願い下

げよ！　って言って帰って来ちゃった」
　母は鼻息を荒くして啖呵を切る。顔は見えなくても、その少し得意気な表情まで容易に想像できた。
「厳しいんだね。青虫が付いているなんて、新鮮な証拠だと思うけどねぇ」
　相手の主婦が母に同情するように言う。
「そうよ、農薬じゃないのよ。食材にこだわりました、が聞いて呆れるわよ」
「それで、そのキャベツはどうしたの？　捨てちゃったの？」
「とんでもない。傷のない七玉はそこの棚に並べたわよ。昼には全部売れちゃった」
「虫食いの一玉は？」
「上だけ剥がして、洗って小分けに切って出したわよ」
「あはは。たくましいわね」
「当たり前よ、もったいない」
　そう言って二人は含み笑いを漏らす。その後は、がさがさと野菜を入れた袋を渡す音と、ちゃらちゃらと硬貨のあたる音が続いた。キャベツに青虫。トシアキが子どもの頃にはよく聞いた話だったが、生産者の品質管理が厳しくなった今ではほとんど見られない事故だ。それでも絶対にないとは誰にも言えず、それが原因でトラブルに発展することもある。話し好きの母の声が、ずっと店内に響いていた。
「……はぁい。いつもありがとね」

「いえいえ。夜もだんだんと暖かくなってきたね」
「ねぇ。でもまたすぐに夏がきて暑くなるよ」
「やだやだ。本当、あっという間に過ぎていくわね」
「子どもも手が掛からなくなったしね。もう姉妹二人とも出て行ったんだよね」
「うん。だからご飯も少ない、少ない。お宅はトシアキ君が戻って来て良かったわね」
「さぁて、いつまでいるんだか」
　今度は二人とも大声で笑う。
「さあ、そろそろ帰るわ。ご飯作らないと」
「うん、気をつけてね」
「トシアキ君もまたねー」
「はい。毎度ありがとうございます！」
　トシアキは顔の見えない主婦に向かって声を上げる。名前は知らないが声には聞き覚えがあった。店に来る客にはそういう者たちも多かった。
「……どうかしたのか？　トシアキ」
　裏の洗い場で作業をしていた父が背後から声をかける。トシアキは振り返らずに、うんと唸って返事をした。
「……卸したキャベツに虫が入っていたって」
「ああ……弁当屋の奴か」

父は店先の方を軽く覗く。角刈りの頭に日に焼けた浅黒い顔。母と同じように四角く、頑丈そうな体形をしている。身長は随分前に追い抜いたが、体の厚みはまだまだ敵わなかった。

「知っていたの？　オフクロ、怒って帰って来たって言ってたけど」

「大丈夫だ。話はつけてある」

「そう。オフクロは短気だから危ないな。怒っちゃダメだろうに」

「……怒っていいんだよ。お前はすぐに謝るからダメだ」

「何でだよ」

「パソコンの注文はどうだ？」

「……ネットショップだろ。注文書なら後で出しておくよ」

「ふん。店、閉めんぞ」

「うん、分かった」

父はのっそりと体を揺らして裏へと戻って行く。トシアキも段ボールの束を抱えて立ち上がった。柱に掛かった古い時計の針はもう午後七時半を指している。暗く、湿り気のある廊下を抜けて店へと出る。売れ残った野菜と、母の姿。その向こうはもう、ずいぶんと人通りが少なくなっていた。

「店閉めるよ、オフクロ」

「あ、もう七時回った？　お疲れさま」

母は振り返るとともに、棚に残った商品をざっと見回す。長年店に立ち続けている彼女は、それだけで今日の売り上げと明日の準備の見通しを立てることができるようだ。トシアキは店先で灯（ともし）るオレンジ色の照明を落とすと、歩道に出した商品からずるずると片付けを始める。そろそろ終わりの時期を迎えたイチゴが一パック、寂しそうに残されていた。

「やあ、お疲れさん。終わりかい？　トシちゃん」

背後からのんびりとした声が聞こえて振り返る。長髪でメガネをかけた白衣の男が手をひらひらと振っていた。

「うん。ウサギの兄ちゃんもお疲れ」

トシアキは片付けを続けながら軽く手を上げる。向かいに店を構える『うさぎ薬局』の店主、あだ名ではなく本名が宇佐義章（うさぎしょういち）という男だった。三十五歳で、既婚。どこかの企業で薬剤師として働いていたが、父の死を機に商店街へと戻り家業を継いだらしい。トシアキも昔から顔は知っていたが、八つほど歳が離れているのでこれまで一緒に遊ぶようなことはなかった。だが商店街に戻ってからは『若手同士』として少しずつ打ち解けるようになっていた。

「そうそう、トシちゃん、聞いたよ。この間、同窓会があったんだってね」

「誰に聞いたの？」

「もちろん、トシちゃんのオフクロさんから。いつの同窓会？　楽しかった？」

「香坂南小だよ。まあ、それなりに楽しかったよ。懐かしかったしな」
「小学校か。いいなぁ。いい子いた？」
「何でそんな話になるのさ？」
「ダメだよ、そういう機会を利用しないと。商店街なんてお年寄りばかりなんだから」
「……オフクロに何か言われたの？」
「みんな心配しているのさ」
　ウサギは目を細めて微笑むが、トシアキは溜め息をついて通りに目を向けた。学生生活を終えて社会に出て五年。仕事上の交友関係は広がったが、昔ながらの友人関係は次第に狭まりつつあるのを感じている。特に『アイバヤ』に戻ってからは、同僚と呼べる者すら存在せず、同世代の女と新たに知り合う機会も想像できなかった。周りの店も閉店の作業を始めており、商店街は夜の暗みに包まれていく。その代わりに、遠くに見えるスーパーマーケット『ネバーライフ』が、月よりも明るい光を放っていた。
「今月から、閉店時間を夜の十二時にまで延ばしたらしいね」
　ウサギがトシアキの視線に気付いて言う。
「ふうん。オープンは？」
「もちろん同じ、朝九時」
「凄いな。うちじゃとても真似できない」
「商店街のどこの店にだって真似できないよ。みんなこれから大変だろうね」

「薬も売っていたっけ？　あそこ」
「売ってない。だから俺は気楽なのさ」
「そんなこと言って、その内チェーンのドラッグストアでもできたらどうするの？」
「そうなんだよ。どうしよう、トシちゃん」
　ウサギはわざとらしく声を震わせる。トシアキは苦笑いを返しつつ片付けを済ませると、灰色のシャッターをガラガラと降ろした。幼い頃から耳に馴染（なじ）んだ、一日が終わる音だった。

六

『十五年後のわたしへ』

相葉　俊秋

二十七才のぼく、こんにちは。
ぼくは、香坂南小学校六年二組の、十二才の相葉俊秋です。
二十七才のぼくは、どんなおじさんになっているのでしょうか。

ぼくの今の夢はサッカー選手になることですが、夢はかなえられましたか。
でも、サッカーは好きだけど、体があまりじょうぶじゃないので、選手にはなれないかもしれません。
だからやっぱり、ふつうのサラリーマンになっているんじゃないかなと思います。

ぜん息はよくなっていますか。
今のぼくは、それが心配です。
お医者さんは、大人になるとましになるよと言っていましたが、本当にそうなりましたか。
それとも、未来になるとすごい薬が発明されていて、完ぺきに治りましたか。
今のぼくは、運動とかもあまりできなくてつらいです。ぜん息が治って元気になったらいいなと思います。

昨日、シバがまたおみやげを拾ってきました。
ソフトボール用のボールでした。
まあまあきれいで、シバも気に入っているので、そのままあげています。
そちらでは、シバはもう死んでしまいましたか。
ずっと生きていて欲しいけど、二十年以上も生きる犬は少ないそうです。

だから、死んでいてもしかたがないと思います。
十五年後には、また別の犬を飼っていますか。
でも、シバの事は絶対に忘れないでください。

今のぼくは、強い人になりたいと思っています。
力も強くなりたいけど、それよりも、どんなことにも逃げ出さない勇気が欲しいです。
そしてみんなを、幸せにできる人になりたいです。
どうしたらいいのかは、まだよく分かりません。
でも、二十七才のぼくが、そんな人になっていればいいなと思います。

十五年後も、またクラスのみんなと遊んでいたいです。

閉店後、店の二階にある自分の部屋に戻ったトシアキは、ノートパソコンを立ち上げてメールをチェックする。興味のないダイレクト・メールとともに、運営する『アイバヤ』のホームページを通じて商品の注文メールがいくつか届いていた。インターネットショップは半年前、パソコンに疎(うと)い両親を説得してトシアキが一人で開設した。地元大阪と関西圏の青果物や名産品を取り扱い、全国から注文を受け発送する。流行の言葉でいう

『おとりよせ』の店だった。まだまだ労力の割に利益は少ないが、店舗もいらず、注文が来てから商品を仕入れるので不良在庫を抱える心配もない。少ない投資で実験的に続けられるのが利点だった。

「二十七歳で、おじさんかよ」

トシアキが十五年前に抱いていた、夢とも呼べない期待。サッカー選手になりたいという思いは、とっくの昔に潰えてしまっていた。小学生の頃からスポーツは苦手ではなく、ボールの扱いも下手ではなかった。ただそれも同じクラスのリュウタやキョウスケにすら劣る程度のものでしかなく、ましてや本気でサッカー選手を目指している小学生たちに敵うはずもなかった。しかも子供向けではない正式なサッカーのルールでは、一試合九十分間をほとんど走り回ることになる。それは喘息持ちでマラソンに不安を抱くトシアキには耐えられない長時間だった。中学に上がるとサッカー部に入部し、本格的な練習にも取り組んだ。おかげで少しは体も丈夫になったが、結局レギュラー入りは果たせずに終わった。

「身の程知らずだったんだ」

そして高校、大学を経て、卒業後は『千里システムズ』という会社に就職した。主に企業を相手にパソコンやIT関連機材のレンタルを業務とする、地域性の高い中小企業だった。営業課に入ったトシアキはパソコンに関する一通りの技術と知識を身に付けた後、得意先周りと新規顧客の開拓に駆けずり回った。しかし理不尽な要求を突きつける

取引先企業への対応に疲れ、また業績重視でありながら褒賞の少ない自社にも虚しいものを感じて、三年で辞職して実家へと戻って来た。

「結局それも、甘えと言われるんだろうか」

実家に帰った当初は次の就職先を探す日々が続いたが、『働かざる者、食うべからず』の両親はモラトリアムを許さず、次第に青果店の手伝いを強要するようになっていった。セリに連れて行かれては荷物運びを任され、店先に出されては商品の陳列と接客を覚えさせられる。するとその内に、市場や商店街の人々に顔を覚えられるようになり、青果店『アイバヤ』の跡取り息子として応援されるまでになってしまった。

「そして今では結婚相手の心配か」

これが、タイムカプセルを埋めた後にトシアキが送った十五年間だった。平凡ながらも紆余曲折を経て、結局今は『アイバヤ』にいる。周囲からよく『八百屋の息子』とからかわれ、自らも嫌っていた実家の仕事に落ち着いていた。あの頃の自分がこの現状を知れば絶望するだろうか。サッカー選手にも、いわゆる普通のサラリーマンにもなれなかった。後悔はしていない。おぼろげながらも青果店の奥深さと面白さに気付き、父や母が単に野菜や果物を売っているだけではないことも知った。だが当時の自分にそれを説明したところで、きっと分かってはもらえないだろう。十五年とは、それほどの隔たりがあった。

「シバももう、いなくなったしな」

飼い犬のシバはあれから五年後の冬に十四歳で亡くなった。その一年ほど前に犬特有の病気にかかり、体調を崩した後には散歩にも行かなくなった。店の隅にうずくまる日々が続いていたが、ある寒い朝に撫でてやると、すでに温かさは失われていた。幼い頃からいつも傍にいた親友だった。トシアキは既に高校生になっていたが、あの日、多分今までの人生で一番泣いた。思い返すと、今でも胸が締め付けられる思い出。それ以来、何の動物も飼わなくなった。

「感傷にふけっている場合でもないか」

シバとの思い出に浸ることを拒んで、トシアキはタイムカプセルの手紙を机の引き出しにしまう。過去を振り返るにはまだ早く、のんびり懐かしむほど老いてもいない。あの頃と同じように未来のことは何も分からないが、目下のところは『アイバヤ』の仕事に取り組むだけだった。

三通目の注文受領メールを送ったところで、机の上の携帯電話から着信音が鳴り響く。横目で液晶画面を見ると、矢神紗恵という名前が表示されていた。

「サエ？」

トシアキは同窓会で見た彼女の姿を思い浮かべつつ通話ボタンを押す。ふと、ウサギが言った『いい子いた？』という言葉が気になった。

「もしもし。どうした、サエ」

「あ、トシアキ？　大変だよ！」

電話の向こうから、なぜか焦るようなサエの声が聞こえてきた。

「……何だ？」

「マスザキ先生が、電車に撥ねられたの！」

「え！」

トシアキは予想外の報告に驚き、耳が痛むほど携帯電話を押し付けた。

「……どういうことだ？　何があったんだ？」

「京橋駅のホームにいきなり人が落ちたの。それでちょうど電車が来ちゃって。私も会社からの帰りで同じホームにいて、顔を見たら先生だったの」

サエは舌がもつれるほどの早口で説明する。トシアキは足の先から震えが走るのを感じていた。

「そんな……先生は？」

「あ、うん。電車が直前で停まったから、ギリギリで助かったみたい」

「助かった？　それを先に言えよ！」

トシアキは思わず声を荒らげ、大きく溜め息をついた。頭に浮かんだ悲惨な光景が消失する。人騒がせもいい所だ。ごめん、というサエの声が聞こえた。

「……つまり、撥ねられていないんだな。先生は」

「うん、そう。ごめんなさい。私もパニックになっちゃった。先生は大丈夫だったの」

「……いや、怒鳴って悪かった。とにかく無事で安心したよ」
「本当。よく助かったと思う」
「それで、先生はどうなったんだ？」
「救急車が来て病院に運ばれて行ったの。後で駅員さんに聞いたら、腕を怪我して京都の病院で治療を受けているみたい」
「怪我をしたのか？　撥ねられなかったのに？」
「そうみたい。落ちた時にそうなったのか、それとも……」
　そこまで言ってサエは口を噤む。電車が停まり命は助かったそうだが、それは腕だけの被害で済んだという意味かもしれない。いずれにしても、サエにも正確な状況は分からないようだ。
「……どう思う、トシアキ。これ、皆に伝えた方がいいかな」
「今、知っているのは俺だけか？　どうして俺に？」
「誰かに話しておきたかったの。でもナギサとかはもう結婚して家があるから気が引けちゃって。トシアキなら相談に乗ってくれると思ったの」
「そうか……いや、今はまだ皆に言わない方がいいだろ。話が大袈裟になって余計な心配を与えるだけだ」
「ああ、そうだよね」
「でも、俺たちだけで内証にしておく訳にもいかないな。とにかく状況を確認してから

立ち読みサンプル
はここまで

でも遅くないだろ」
「お見舞い、行ってみる？」
「……行った方がいいかもな」
　トシアキはわずかに考えてからつぶやく。さすがに数日前に顔を合わせたばかりの恩師に対して、知っておきながら無視する訳にもいかなかった。マスザキ先生の身に何が起きたのか。サエから電車に撥ねられたと聞いた時、一瞬だけ脳裏に浮かんだ映像に強い恐怖を覚えた。十五年前のあの日に見た、忘れることのできない光景。
　朱に染まった草むらに落ちた、リュウタのちぎれた頭部だった。

七

　翌日の夕方。トシアキは仕事を早めに切り上げたサエとともに、マスザキ先生が入院している総合病院へと訪れた。前もって病院に問い合わせたところ、マスザキ先生の怪我は打ち身や捻挫、切り傷程度だと聞いたので、携帯電話で直接連絡をとり見舞いに行く旨を伝えておいた。清潔感のある六人部屋の病室。窓際のベッドに座り読書をしていたマスザキ先生は、トシアキたちに気付くと本を伏せて顔を上げた。